
大日本帝国四番街へようこそ

斎藤雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本帝国四番街へようこそ

【Zコード】

Z0753A

【作者名】

齊藤雅

【あらすじ】

女子学生の藤波飛鳥は靈力を持つている。ある時友達の佳織と共に、喫茶店の古い扉をくぐるとそこには別の歩み方をした『大日本帝国』があつた!!

第零話 異世界への入り口

「もう二月だつてのに何だよこの寒さは……真冬並みじゃん……」
いつになつたらコート無しで登下校できるんだか、と艶やかな黒髪の少女が叫ぶ。鋭い緋色の瞳は病的なまでに澄んでいる。

「本当に今年は春が遅いねえ。ウグイスの声もしないし。」

20歳ほどの女性が少女にブルーベリーの紅茶を勧めた。その勧められた少女は半ばため息をつきながら乾いた喉に紅茶を流し込む。

「佳織つて紅茶淹れるの上手だよねえ……。」

喉にだけ春が来たみたい。そんな感じだつた。

誰もいらない閑静な喫茶店のカウンターをはさんで二人の女性は会話を楽しんだ。

誰もいらない喫茶店 それは唯一の安息の場だつた。

瞳が赤いだけでなく普通の人には見えないものが見えるだけで周りから敬遠され続け友達など学校には一人もいない。親にも気持ち悪がられて捨てられた。そして佳織に引き取られて今の自分がある。

そんな忌まわしい回想を捨て藤波飛鳥は佳織に話しかけた。

「佳織、あれ何？」

飛鳥は随分使い込まれた木製の扉を指差した。一つだけ異彩を放つてている。

「ああそれね・・・・・。」

洗つたカップを拭きながら佳織は

「異世界への入り口かな？」

いたずらっぽい笑顔で言った。怪訝な表情をする飛鳥に言った。

「行つてみる？」

『行つてみる?』この言葉ほど飛鳥的好奇心をくすぐる言葉はない。

小さな子供のように眼をキラキラさせながら、

「うん！」

満面の笑みで返事をする。

「じゃあ今日は閉店ね。」

カツプを拭き終わった佳織は戸締りをするとそのままかけた扉のノブに手をかけた。

「うわあ。」

目の前に広がる異世界に飛鳥の眼は釘付けになつた。

視界を覆わんばかりの建物。

狭い空。

どこか懐かしい感じのする町並み。

どれもこれも飛鳥にとつてはとても新鮮なものに写った。

「ここが大日本帝国四番街。私の故郷よ。」

佳織は飛鳥の方を見ながら言つた。大日本帝国 その言葉に飛鳥は驚愕した。

「だ、大日本帝国う！？」

「この街が？？」と初めて外にでた小さな子供のよう面倒を見開き、辺りをきょろきょろと見回した。その緋色の瞳には、はじめましてとでも言わんばかりに建物が写り込んでくる。

「なんかあたしの中のイメージと全然違う・・・。」

「驚くのも無理ないわね。歴史の授業で習ったことは全く別の歩み方をして来たんだから。例えば『向こう』の帝国みたいに言論統制とか廃仏毀釈運動みたいなことはやつてないし、明治維新のときから民主主義もやつてる。」

昔のお偉方がヨーロッパ回つて「こりやあいー！」って思ったことを全部取り入れたみたいね、と微笑む。

その時、建物の上から純白の狼 のようなもの、少なくとも飛鳥にはそう写つた が佳織のもとへ飛び降りてきた。

それはとにかく大きかった。飛鳥と佳織を背に乗せて余りあるくらい。そしてその純白の豊かな毛は炎が燃えるが如くに微風になびき頭には一対の金色の角がある。

「あら、お散歩帰り？」

佳織はそれに慣れきつているのか彼女の白い手でその狼の頭を撫でる。狼の方はじゃれつく猫のように佳織に甘える。

「！」これ何なの？「

右手の指を狼に向けながら飛鳥は口をぱくぱくさせて言った。その姿はまるで黒船をみた江戸の町人のようだつた。

「あ、そうだつたわ。この子は吹雪。私の狛神こまがみなの。」

『狛神』という単語に飛鳥の頭の中にはたくさんの疑問符が生まれた。

「なにそれ？」

「うーん。なんていうか、陰陽師の式神みたいなものかしら。」

当の佳織も説明に苦心している。その様子を見て飛鳥はそれ以上のその狼に関しての質問をやめた。

「・・・佳織はここに住んでるの？」

「そうよ。本業はここで言霊師をやってて、むこうでのカフェは半分趣味。でもカフェの方はこつちとあつちを繋ぐ扉のような役目もあるけど。」

「何で繋ぐ必要があるの？」

別にやんなくてもいいじゃん、と訝しげに尋ねた。

「それは私にもわかんないわ。あくまでも私は帝国政府の下つ端役人だもの。そういう事は知らされないわ。」

「ええつ！？ここつてそういうオカルチックな仕事もできるの！？それも政府の役人！？？」

もう飛鳥は混乱状態に陥っていた。扉の向こうの別世界。別の帝国。白い狼。そして奇妙な職業。何がなんだかわからない。

思考をぐちゃぐちゃにされた飛鳥を尻目に佳織は辺りを鋭い目つきで見回して言った。

「とにかく家に行こう。」

思考整理から現実に引き戻された飛鳥は、やはり疑問を湛えた表情で「何か用があるの？」

できれば飛鳥は佳織と一緒にこの街をぶらつきたかったのだ。

「別に用があるってわけじゃないけど……。帝国は街によつて治安の良し悪しの差が激しいの。特にここ四番街の治安は昼間は普通に平気だけど夜になつたら帝国一のアンダーグラウンドよ。夕方も結構危ないのよ、いくら私は政府の役人だからって安心はできない。」

「そう言つや否や佳織は狛神である吹雪の背に軽やかに乗つた。その動きはさながら水が流れるよ。」

「急ぐわよ。」

乗つて、と佳織に促されると飛鳥はおつかなびつくり吹雪に手を触れる。誰だつて最初はいい氣分ではない。ましてや見た事の無い『異形』の生物に乗るなど。

「噉んだりなんかしないわよ。」

それでも躊躇う飛鳥に痺れを切らしたのか佳織は優しく飛鳥の腕を引き吹雪に乗せた。

「うわあ、ふわふわ。。。」

飛鳥は静かに驚いた。

「じゃあ行くわよ。」

その言葉を合図に吹雪は大きく飛び上がつた。

「と、と、と、飛んでるう！？」

飛鳥はもはや遠くなつた街を見下ろした。佳織のほうは飛鳥が驚くのには気にもせず、ただ真つ直ぐ前を見詰めていた。紺碧の空には大きな満月が懸かつてゐる。月光に照らされて佳織の黒髪は銀色に輝いてゐる。吹雪の毛もまたそうだった。銀色の炎が燃えるようになびいてゐる。黒と白を基調とした服もそう感じさせるのか傍からみればそれは月夜を行く魔女のようだつた。

飛鳥は町を見下ろしてゐる。

白熱灯のような光を発する電灯がこれでもかと建物が詰め込まれた街を内側から照らしてゐる。その中には現代風のネオンもあり、レトロな街のなかで異彩を放つてゐた。こんなに空高く離れてゐるのにネオンと認識できるのだからよほど大きいのだろう。

明治～昭和の時代が混ざるなかにどこか現代の風が入り乱れていて、なんとも摩訶不思議であった。そして人間味のない無機質な現代社会のビル群とは違つて有機的な暖かさが感じられた。

冷たい風がとても心地よく飛鳥の頬と髪を撫でていく。

白銀の月に照らされて飛鳥はもうひとつの大日本帝国に思いを馳せた。

第3話 始まり

「そう言えば。」

「何？」

「佳織は言霊師をしてるっていつたじゃない？具体的にほどんな仕事なの？」

そうねえ、とその細い人差し指を口元に当てながら佳織は言葉を組み立てている。しかし両眼は前を見つめたままだった。

「日本人は言霊を信仰している民族なの。少なくともこの帝国では。言霊っていうのは人が発した言葉に宿る感情のない精霊みたいなもので、人によつては自由にそれを使える。その中には生まれつきだつたり、訓練で使えるようになつたりするのもいるけどね。言霊師はその言霊を使ってこの世の森羅万象を操作して仕事をするの。基本的にこれと言つた内容はないわ。殆どが政府からの命令なんだけどたまには一般の人からも仕事がくるの。例えば

「例えば？」

「お祓いとか幽霊退治みたいなのとかかな。特に四番街や一番街は鬼やら神様やら向こうの日本では眼に見えないものがたくさんいるからね。」

「あ、もうすぐ私の家よ。」

飛鳥は佳織が指差した方向を見た。そこには高層マンションが建つていて、やはりそれもレトロな雰囲気を醸しだしていた。内側からは明かりが暖かく漏れていて見ているだけで冬の寒さが消えていきそうだった。

吹雪が少しずつ高度を下げる。先程とは反対に街とういう『箱』に詰め込まれた建物が段々近くに見えてきた。次第に佳織のすむマンションの看板に書かれた文字が鮮明になつてくる。

「はい。『到着』」

吹雪は『四番街マンション 華陽』と書かれた看板の前に降り立つ

た。その際には4本の脚の周りに小さなつむじ風が巻き起しり降り立つ様は鳥の羽のようだった。

「「」苦勞様。」

微笑みながらさう言つと、佳織は吹雪の頭を優しく撫でる。吹雪は気持ち良さそうに眼を閉じるや否や、血りを風と一緒に化させて再び月に照らされている夜空へ飛び立つた。

「あつとこつ間に夜になつちやつたね。」

緋色の両眼で飛鳥は空を見上げた。月明かりに照らされて普段の混じりつ氣の無い黒髪は銀色に輝いている。

「明日は学校あるの？」

軽く伸びをしながら佳織は尋ねた。

「「」つん。だつて今日中学の卒業式だつたし。まあ高校に上がつてもおんなんじ学校だけど。それはどーでもいいとして

早く春になんないかな、と飛鳥もまた伸びをした。

「じや、部屋行こつか。」

今日は早く寝よ、と言つながら歩き出す佳織に飛鳥は着いていった。

「ああやつぱりお風呂つて最高～」

ドライヤーで乾かした髪を血邊げにブラシで梳かしながら飛鳥は言った。

元来彼女はお風呂に入ることが好きだった。風呂上りのやつぱり感は自分の悪いものが全て流れていつたような感があるからだ。その時飛鳥はふと髪を梳かすのをやめ、

「ねえ佳織。」

「何かしら?」

「「」の国で太平洋戦争つてあつたの?」

「あつたわよ。だけど日本が負けじゃないの。簡単に言つと

最初は日本が優勢だつたんだけどアメリカが段々盛り返してきたわ。当の日本も負けるわけには行かないからそりやあもう頑張ったわね。向こうの日本と近代からは似たり寄つたりでも根本は違うからね。神風特攻隊はあっても南京大虐殺はなかつたり。それでいろいろしているうちに戦争が膠着状態になつて結局は講和したわ。今となつては持ちつ持たれついい関係つてところね。

「じゃあ日米安全保障条約もないつてこと?」

「そういうことね。」

じゃあ、在日米軍もないのかなあ、と飛鳥は思つたが聞くのをやめた。

「明日は仕事あるの・?」

代わりにそう尋ねた。

「えーとーつぐらいあつたような・。」

記憶を掘り出すように佳織が答えた。

「ホントッ! あたしも行きたーい! ねえつ、良いでしょ?」

幼児のように無邪気に飛鳥はおねだりをする。彼女にとつておねだりは久しづびりだった。本当に欲しいものは自分で何とかしたし、いつもおねだりをする相手 例えば自分の両親 がいなかつたからだ。

そんな飛鳥の心境を知つてか知らずか佳織は苦笑しながら

「じゃあ明日は早起きね。服は・・・今着てるみたいな私ので良いかしら?」

「うんっ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753a/>

大日本帝国四番街へようこそ

2010年10月11日23時56分発行